

医療法人相生会 にしくもと病院

(熊本市南区)

地域に在宅医療の強化を図り 「熊本ホスピタウン構想」を推進

今年6月に新病棟が完成した、にしくもと病院。従来から提供している整形外科分野での先進的な診療と併せて、リハビリや在宅医療分野を強化。さらに高齢者向け住宅やクリニック等の整備を図ることで、同院が20年にわたって推進している「熊本ホスピタウン構想」の実現をめざしている。

撮影=緒方 司



開放的で明るい雰囲気の外来受付。スタッフのていねいで対応が感じられる接遇は、特に高齢者に好評だ



↑手術室は2室に増やし、整形外科、泌尿器の低侵襲治療を提供。関節鏡視下手術の累計症例数は約2,700件にのぼる



↑「地域包括ケアシステム、在宅医療連携拠点のモデルをここの熊本市南区に創りたい」と抱負を語る林院長



←病棟中央部に位置するスタッフステーション

→アメニティの向上を図った病室からは、周囲の田園風景や、近くを走る九州新幹線などを眺められる



→「スポーツ器具も新しくしたり、リハビリ室、同院の回復期病床数(36床)に対するセラピスト数(24人)は県内トップクラス



↑外来、検査などのゾーンは3色に分け、一目で認識できるように工夫

病院DATA

医療法人相生会 にしくもと病院
住所：熊本市南区富合町古閑1012番地
電話：096-358-1118
病床数：146床(一般80、回復期リハ36、介護療養30)
<http://www.nishikuma.com/>

→医局では多職種が気軽に訪れ、打ち合わせる風景もみられるようになった



→新病棟は6階建て・延べ床面積約7400㎡。その周辺に介護施設や保育園、レストランなどを集積させた「タウン」の創出をめざす



20年来の理想・テーマが結実へ
めざすは慢性疾患の高度包括的医療センター

「新病棟の完成で、かねてから進めてきた熊本ホスピタウン構想に弾みがつきました」と明朗に語るのは林院長だ。

ホスピタウンとは「ホスピタル」と「タウン」を合わせた言葉で、医療を核に介護施設や住宅を集めた、健康で住みやすい町のこと。現在、国が進める「地域包括ケアシステム」と通底する社会システムだが、林院長は院長就任直後の1993年以来、病院がめざすべき姿として同構想を一貫して掲げてきた。

しかしその道のりは平坦ではなかった。同院は経営母体の脆弱さから、過去3回も存続の危機にさらされている。その一方で林院長は、地域でいち早く先進的な治療「関節鏡視下手術」を導入、「地域リハビリテーション」を基本としたリハビリ機能の強化やISO9001の取得、地域との交流活動への地道な取り組みなどによって、旧来の「暗い病院」という地域住民のネガティブなイメージの払拭に成功した。

経営基盤も安定した2007年には、新病棟の建設を軸にした「新熊本ホスピタウン構想」を発表。今後の病院像を、①予防から看取り、②在宅医療、③低侵襲手術、④リハビリ、⑤臨床薬理からなる「慢性期疾患の高度包括的医療センター」と定めた。趣旨に賛同する40歳から50歳代の経験豊富な医師、看護師・多職種を積極的に集め、排泄、運動器、呼吸器、脳血管、NST、褥瘡、糖尿病、緩和ケアなどのチーム体制の充実を図ってきた。

医局のフラット化でチーム意識を醸成
高齢者施設を建設、レストランの誘致も

今年6月に完成した6階建て新病棟では、外来および病室のアメニティ、リハビリ室などを一新した。さらに整形外科・皮膚科の手術に加えて泌尿器科の手術にも対応できるように、手術室は2室を増やし、健診センターを新設するなど診療機能を拡充させた。

またバックヤード部では、林院長の肝煎りで、あえて医局にカンファレンス室、資料・図書室を併設した。「在宅医療をはじめチーム医療の重要性が増すなかで、チーム間のコミュニケーションは欠かせません。医局がカンファレンスの場となれば、従来、多職種にとって敷居の高かった場所を日常的に訪れるスペースに変えることができます。そうすることで職種間の垣根が取り払われ、チーム意識がより強固になるのではと考えました」(林院長)

今後、同院では高齢者住宅の開設を予定しているほか、敷地一帯にはレストラン、鍼灸院、クリニック、保育所、薬局などさまざまな施設の誘致も進めている。

「団塊の世代が安心して身を委ね、次世代に迷惑をかけずに自然体で老いて、逝ける(往ける)。それが実現するハードとソフトを創るのが私の夢であり、使命なのです」と、林院長はさらなる意欲を燃やす。